雨乞いの弁天さん（貴志）

貴志の慶安寺の本堂横に弁天堂があります。その中には、手が八本もある金色の弁財天様がまつられています。人々に「雨乞いの弁天さん」と親しみをこめて呼ばれています。

むかし、むかしのこと。田植えの時期になったのに、雨が降らず、村のどの池にも水がほとんどありませんでした。

「雨がほしいのお。」

「池の水がなければ、田植えができん。食べる米が取れないばかりか、お殿様に納める年貢米もないぞ。」

村人たちは、ほとんど水がない谷間の大きなため池を眺めては、ため息をついておりました。村人たちは何度も集まって話し合いをしましたが、なかなかよい考えは出ません。村人たちの足は自然と氏神様へ向きました。

「どうか雨が降りますように。」

とお祈りしましたが、雨はいっこうに降る様子がありませんでした。

そんな時、一人のおじいさんがこんな話をしました。

「慶安寺にまつられている弁天さんのことじゃが……。あの弁天さんは、むかし、村の中で一番大きな上の池の近くにあった古いお寺におられたそうじゃ。もしかしたら、帰りたいと思っておられるかもしれん。そこで相談じゃが、一度あの弁天さんをもとの池のほとりにお連れ申し上げて、お願いしてみてはどうだろうの。」

聞いていた村人たちは、諸手をあげて賛成しました。このことはあっという間に村中に広まり、村をあげての行事になりました。早速、準備に取りかかりました。

弁天様を新しい白い布でまき、村一番の力持ちが背負って、そろりそろりと「上の池」の中にある島へとお連れしました。そこに祠を建て、お酒や海・山・里の珍しいものをお供えして、村人たちが夜も交代で泊りこみ、お祈りを続けました。お寺のお坊さんも、

ジビジビ　ジャバジャバ　ジョボジョボ
雨　たんもれ（賜りたまえ）　じゅうもん（充分）の
大雨くだされ水神さん
天にしるけはないかいなあ

と繰り返し、繰り返しお祈りをしました。しかし、なかなか雨は降りませんでした。それでも村人たちはあきらめず

にお祈りを続けました。

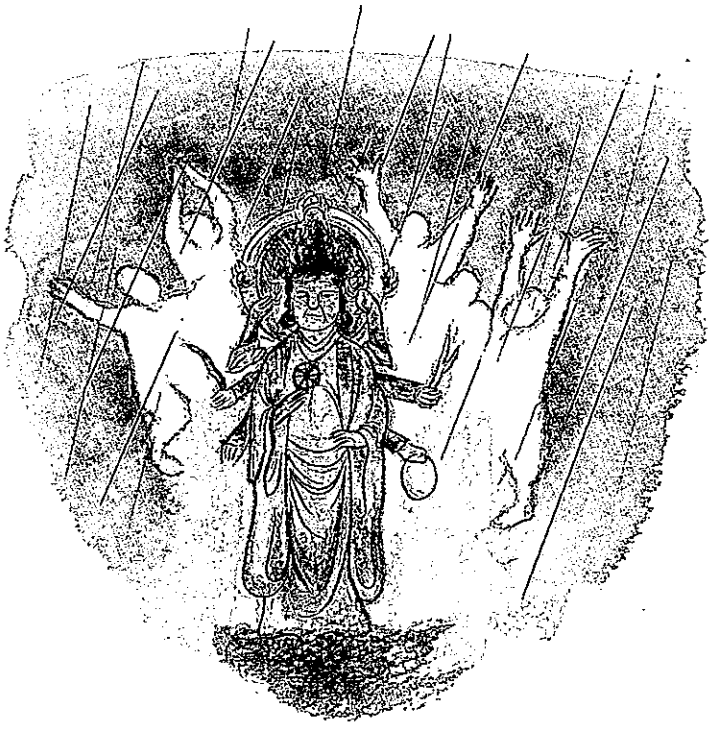
ジビジビ　ジャバジャバ　ジョボジョボ
雨　たんもれ　じゅうもんの
大雨くだされ水神さん
天にしるけはないかいなあ

すると、お祈りを始めてから、ちょうど七日たった朝のことです。今まで雲一つなかった空がにわかに曇ってきて、ぽつぽつと雨が降ってきました。お祈りが勢いよくなりました。

ジビジビ　ジャバジャバ　ジョボジョボ
雨　たんもれ　じゅうもんの
大雨くだされ水神さん
天にしるけはないかいなあ

やがて本降りとなりました。子どもも大人もみんな外に飛び出しました。抱き合って飛び跳るやら、天に向かって手を合わせるやら、村人たちの喜びようといったら口では言い尽くせないほどでした。

この後、田植えの時期に日照りが続くと、慶安寺の弁天様を上の池のほとりにお連れして祈れば雨が降るという言い伝えが生まれ、「雨乞いの弁天さん」と呼ばれるようになったそうです。

今でも毎年四月には、雨を降らせてくれたこの弁天様に感謝の気持ちを表す弁天講という行事が行われています。

ジビジビ　ジャバジャバ　ジョボジョボ
雨　たんもれ　じゅうもんの
大雨くだされ水神さん
天にしるけはないかいなあ